

ペシャワール会報

No.79



表紙絵 帰郷した土木技師 甲斐大策

ペシャワール会 〒810-0041 福岡市中央区
 大名一丁目10-25 上村第一ビル307号
 電話 〇九二(七三三)二二七二
 FAX 〇九二(七三三)二二七三

難工事乗り越え、用水路ついに通水	中村 哲
水が流れた！	橋本康範
用水路建設の最前線から	鈴木 学
困難を友とし、ユーモアを糧として工事完遂	石橋忠明
怒号と哄笑の飛び交った三ヶ月でした	鈴木祐治
重機購入の特命帯び、カラチへ行ってきました	近藤真一
寄る辺なき患者さんの「砦」として	仲地省吾

ペシャワール会の活動は、1983年9月、中村医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々についての理解を深めていきたいと願っています

難工事乗り越え、用水路ついに通水

用水路は取水口周辺の工事を完了、三月七日一部通水

PMS（ベシヤワール会医療サービス）総院長 中村哲

「非常事態」を宣言

みなさん、お元気ででしょうか。昨年十二月以来、殆ど水路建設現場に つめていました。再々会報などでお伝えしたように、取水口と堰の工事が最大の山場を迎えていたからです。

クナール河はヒンズークッシュ山脈最大の川で、河川敷が一キロメートル以上、最高峰の連山の雪解け水を集め、春先に洪水のような水量が押し寄せます。川の水位が下がる冬季に取水口の工事を済ませないと、一年完成が遅れてしまいます。

このため、十一月末に「非常事態」を宣言、突貫工事らしきものに入りました。「らしきもの」というのは、万事が良くも悪くものんびりした現地で、「突貫工事」など見たことも聞いたこともない人々が多いからです。昨年夏以来、現地・日本側共に奔走して重機を

そろえ、レンタルを含めると掘削機（油圧シヨベル・ユンボ）四台、ローダー二台、ダンプカー十二台などがフル回転、PMS（ベシヤワール会医療サービス）としては、これまでにない機械力を投入、六百名の作業員と共に、文字通り「決戦」態勢でありました。

小生が何年か毎に「過去最大の挑戦」というせりふを述べてきたので、事務局の中には「またか」と思った方もあるかも知れませんが、今度ばかりは生きた心地がしませんでした。かつて十数年前、弾丸が飛び交う場面で仕事をすることもありますが、今となつては大した苦勞ではなかったように思われます。二〇〇一年の空爆下の食糧配給に劣らず、誇張なく、これほど緊迫した状況は生涯でありませんでした。

水路建設に携わった日本人ワーカー十六名、殆どが二十代の若者たちです。強烈な陽射し



完成した取水口周辺部（クナール河沿い）

と冷たい水の中で、現地の人々と一緒に、汗と泥にまみれて働きました。休日返上、朝は五時に起き、時には夜遅くまで、時には冷たい雨の中で必死の作業が続けられました。直接現場に赴く者はグラエヌール診療所に寝起きし、或る時は現場監督、或る時は先頭で働く作業員、または重機の運転手として、よくそれぞれの持ち場を守りました。この三ヶ月



自ら重機を操り工事の陣頭に立つ中村医師

だけは医療・農業関係のワーカーたちも動員され、カーブルやカラチ、ラホールまで重機の購入に赴いたり、現場で働いたりしました。事務は事務で仕事量が膨大となり、会計、買い付け、事務所管理など、重責をよく果たしました。

アフガン人作業員たちもよく働きました。大半が早尅かんぱつでやられた村の人たちだったので、「水が来る」という希望もあり、士気が高か

ったと言えます。また、農民たち自身が優れた石工であり、岸壁の石積みや蛇籠じよぶ（ふとん籠）の石詰めをたちまち習得し、石工不足の杞憂きゆうは苦もなく解消しました。蛇籠のワークシヨップで熟練工と言えるまでになったのも彼らでした。

一人の殉職者もなく

人々はどうしても華々しい場面だけに眼を向けがちですが、日本では考えられない不便さの中で、資機材の調達や行政との折衝、地元との交渉、どれ一つとつても、PMS全体の総力をあげた協力が必要でした。例えば、蛇籠生産に必要な針金の調達はパキスタンからの輸入に頼らねばなりません。これまで作られた約五千個の蛇籠に使われたワイヤが百トン以上、買い付けと輸送は全てペシャワールの基地病院が行いました。日本と同様、実に無数の協力が地下茎のように現場を支えていたことを強調したいと思います。それでも、診療はもちろん、井戸関係の仕事が大きな支障なく継続されたことは、奇跡に近く思われます。

ともあれ、三月七日、堰と取水口水門、貯水池造成、そこまで導水する二キロメートルの水路は一応の完成を見て通水確認、「非常事態」を解いて一つの区切りとしました。き

つと現場で張りつめた気分が続いたからでしょう。三月中旬、一旦帰国して事務局で報告し終えた後、急に力が抜け、虚脱状態ではんやりと何日も過ごしました。皆がそうでした。職員たちの一部が途中で現場を離れて続々と辞職しました。普段「技術者」を自負して立案に参加した者で、自然の出した答えで机上の空論があっさりと破れ、失意のうちに去った者もいます。小生は六キログラムの体重減少でしたが、誰もがやつれました。しかし、この張りつめた気合で、犠牲者を一人も出さなかつたのではないかと思います（これ程の工事なら普通数名の殉職者が出て不思議はないそうです）。

補修可能な伝統技術に固執

特筆すべきは、この水路が決して小生の発案ではなく、先人たちが築いてきた伝統技術の模倣である点です。コンクリートは水門の一部と架橋に使われただけで、殆どが現地維持可能な伝統的技術が用いられました。肝腎の堰は、基本的に筑後川本流にある山田の斜め堰が参考になりました。詳細は割愛しますが、結果的に驚くほど似た構造のものとなりました。水路は底面幅四メートル以上、上部幅六メートル以上、護岸は高さ一メートルの蛇籠を二段重ねて水路壁とし、この上に土



苦心の末、取水口工事を完遂した現地作業員たち

どに習熟し、土質や地形の理解を深め、人々の圧倒的な支持を得たからです。また、取水の貯水池を水路に組み込んだのも、意味があります。流量の調節もありますが、日本で無数に見られる堤が現地で皆無に等しく、年々消えてゆく山の雪に代って今後重要な役割を果たすと確信されるからです。

あらゆる「正義」が白々しく……

着工を宣言してからちょうど一年、三月七日午後三時半、六百名の作業員、重機の運転手、水路関係のPMS職員全員が取水口現場に集結し、喜びを共にしました。偶然通りかかったニングラハル州知事が駆けつけ、素直に我々ペシャワール会と日本への感謝と喜びを述べました。職員の中には元タリバン兵も少なからずいたはずですが、命の前には新政府派も反政府派もありません。全ての有数が無限大で割ればゼロになるように、どんなに人為の壁が厚くとも、圧倒的な自然の恵みの前では対立を解消する。平和のカギはここにある。そんなことを実感させた幕切れでした。昨年十一月の「米軍ヘリ銃撃事件」後、「水路現場飛行を避ける」という米軍側の約束にもかかわらず、今日もヘリコプターが、超低空でたたましく頭上を過ぎて行きます。あらゆる「正義」が白々しく、何やら搭乗す

る米兵たちが哀れに思われてなりませんでした。

作業は三月十六日に再開、更に努力が必要ですが、これを支えてくれる日本の方々に報告すると共に、心から感謝します。

中村哲（なかむらてつ）

九州大学医学部卒。専門は神経内科（現地では内科・外科もこなす）。国内の病院勤務を経て、一九八四年パキスタン北西辺境州の州都ペシャワールに赴任。以来二十年にわたりハンセン病コントロール計画を柱にした、貧民層の診療に携る。一九八六年からはアフガン難民のための事業を開始、現在アフガン北東山岳部に三つの診療所を設立、診療にあたっている。九八年には基地病院PMSをペシャワールに建設。また病院・診療所で患者を待つだけでなく、パキスタン北部山岳地帯の診療所を拠点に巡回診療も行っている。二〇〇〇年以降は、アフガニスタンを襲った大旱魃対策のための水源確保（井戸掘り・カレーズの復旧。作業地千ヶ所以上）事業を実践。さらに二〇〇二年春からアフガン東部山村での長期的復興計画「緑の大地計画」を継続、昨春からはその一環として灌漑水利計画に着手。年間診療数約十六万人（二〇〇三年度）。

*ワーカー通信

水が流れた！

農業・水路計画担当

橋本康範

ついにD地区（貯水池）まで水が流れた！

水が流れた。渴ききった喉を鳴らすかのようにかすかな音を立てながら、ゆっくりと新たな道を探すように水は用水路の中を進んでいった。そしてそれはついに目標であったD地区まで到達した。以前私は「戦場へ」ということを書いたが、それは確かにけたたましく連日のように用水路上を低空飛行する米軍のヘリを含め、アメリカが私たちの活動している地区を「戦場」と指定していることもあるが、まさしくこの三ヶ月は水との戦いであった。やるか、やられるか、という状態であったのである。すなわち、もし増水する春の前に水を流せなければ私たちのアフガンでの活動は一切終了する予定であった。

二月十五日を通水の期日としたのが十二月上旬、その時点で未だ用水路の内装はおろか二m以上の岩盤の掘削、また取水口および水門、涸れ川が水

路の上を流れるためのトンネル、道路を横切るための橋、そして水を貯める池内の排水門などのコンクリート作業はほとんど手付かずの状態であった。さらに用水路のレベルもはっきりしない状態であった。それでも現地職員たちは我々がどれだけ厳しい状態にあるのか、ほとんどの者たちが危機感を持っていなかった。常にマイペースで、**「神のお告げのままに」**生きるアフガンの人たちにとって、先を見通して計画的に物事を進めていくということはなかなか出来ないのである。

泥と汗にまみれ「士気」発揚

まずは彼らの意識を変えていくことから始まった。朝礼で、ミーティングで何度となく「激励」した。現場では日本人スタッフが先頭に立ってこれまで以上に泥や埃にまみれ走り回った。

中村医師は水浸しになりながら堰の先頭で指揮を取り、また自ら掘削機を操作した。清宮君は常にスムーズに重機のアレンジをし、また自身もほとんどの重機を操作した。鈴木学君は現地のエンジニアよりもまく日雇い労働者をまとめた。またコンクリート工事、蛇籠作業でかなりの力を発揮してくれた。鈴木祐治君は医療部門から臨時で駆けつけ持ち前の努力と一所懸命さで何枚も現地服をぼろぼろにしながら堰、対岸の護岸を指揮した。小宮君は九月に現地にやってきたにもかかわらず、何でも地道に黙々とこなした。堤の芝生もきれいに移植された。伊藤君は清宮君の仕事を引き

継ぎ一つのことを真剣に考えながらがんばっている。大越君は私が留守中のオフィスをしつかりとめ緊急時にもかかわらず、ほとんど問題を起こさずに切り抜けてくれた。川口君は緊急時お金の出入りが激しく、ほとんど現場にも出られないという厳しい状況の中がんばった。宮路君はほとんどの労力が用水路に注がれる中、井戸のほうを守った。また大越君、川口君、宮路君はジャララバードでドラエヌールにいながら、週末もどって来



河川での作業のための船も自家製
(左から橋本、小宮、鈴木祐治、宿舎の門衛さん、鈴木学)



取水口水門

る我々をおいしい手料理で迎えてくれた。石橋さんは掘削機の操作はもちろん堰の埋め立て、ダンプの誘導でも活躍した。私自身は以前木工所で勤めていたほんの少しの経験を生かして水門の設置に携わった。

些細な喜びを支えに

十二月末からは休日返上で立ち向かった。そんな中徐々に職員たちの姿勢にも変化が現れ始めた。日本人が必死でやっているのにどうして我々は休んでいられようか」といってがんばってくれた。

正直言うとこの三ヶ月は本当に厳しかった。毎日が緊張の連続であり、一日が終わるたびに寿命の縮む思いもした。毎日ぎりぎりの状態で働きはるぼろになった身体や心を癒すものや空間がほとんどない状態での「戦い」だった。しかし、幸い我々はどんな些細な喜びも大きな幸せとして受け止めることが得意だった。そしてどんなときでも私たちはいつも苦労やつらさを笑いに変えた。すっかり日がおちた夜道、一日の仕事を終え家路につく車の中ではいつもすがすがしさを感じ「生きている」ことを実感した。我々は当たり前だがいつも自分たちの仕事に誇りを持ってやる事が出来た。

このような場を与えてくださった中村先生に、いつも我々の現地での活動を支えてくださっている事務局の皆さん、そして会員の皆さんに感謝しています。ありがとうございます。

▼寄附をしていただく皆さまへ▼

*当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄附については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、御願いいいたします。

▼記入は分かりやすく▼

*ご寄附をお送り頂いた郵便払い込み用紙は、郵便局からはコピーが届きますので、判読しづらい場合がございます。楷書で分かりやすくご記入いただければ大変助かります。

表紙をめくる小さな物語40
帰郷した土木技師

甲斐大策

アンワルは、十三才まで過したトゥットカラ村があった場所へ二十四年振りに戻った。バグマンの峰を背に台地の外れに立っていた。カササギが二羽、地表をなめるように平原と接する国道の方角へ下りていく。アンワル一族が代々掘り整えてきた一本のカレーズは、平原の果樹園や穀類の畑地約二・五キロ四方を潤していた。泥土を浚えるための堅穴は今、アンワルの眼前に、わずかな隆起として残るだけだった。

八〇年春、旧ソ連軍と政府軍がムジャヒディン討伐の名目で村を急襲した。戦車の砲撃と火焰放射器で村を蹂躪しつくした。五十家族約四百名の村人の殲滅目的だった。しかし、少年アンワルを含む約百名の男達は戦いに出ている。

老人や女、子供、家畜達は、逃げまどい仆れ、肉片と化していった。十数名の者達は流れに沿って走り、平原へ伸びるカレーズ（地下導水路）へ逃げこんだ。軍は流れにガソリンを入れ火を放った。人々は焼かれ、水路の壁は完全に崩落したのだった。

戦場からイラン側へ出て知己を頼り、アンワルは成人し教育も受けた。十年前には、水利関連の土木技師の職も得た。家庭も持った。

カレーズ復活の思いは、荒地を渡る風に消えていく。いつの間にか、コンクリート側壁の近代的な水路を考えていた。そして、そんな水路をイメージしている自分に一抹の淋しさを感じてもいた。

水路建設の最前線から

水路計画担当

鈴木 学

怒濤の三ヶ月

この三ヶ月間は、まさに怒濤のように過ぎ去った。総力戦と呼ぶにふさわしく、人員も重機も資材も使えるものはすべて投入しての三ヶ月だった。

実際、中村医師、橋本さん、清宮さん、石橋さん、鈴木祐治さん、伊藤さん、小宮君、そして自分。水路に日本人常駐スタッフだけで八人という異例の体制が敷かれた。現場に日本人を増やし、各自が直接中村医師の指示にしたがって迅速に各地区を完成させていかなければならない。それほど時間は切迫しており、雨季の到来は迫っていた。雨の中の作業では、危険度が急上昇するのとは反比例して作業が全くはかどらない事は、これまでの経験から痛いほど身にしみていた。アフガニスタンにおいて不届きとも思えたが、毎晩明日の晴天を祈って眠った。そして最も重要なことは、クナル川の水位は徐々に増加の兆しを見せており、「取水口と水門」、「斜め堰ななめづゑ」、「取水口の対岸の護岸」の三つの工事は絶対に増水開始前のこの

時期を逃すわけにはいかないことだった。水位の上昇はこの三つの工事を不可能にし、これは最悪の場合、大量の水が水路内に流入し水路が崩壊することや、冬季の取水が出来ない水路になることや、斜め堰の影響で夏季に対岸が削られクナル河の流れが変わる等の、水路にとって致命的ともいえる欠陥を残すことを意味した。もちろん、最低水位時における通水を目標としているからには、D地区までの全区間一ヶ所でもとりこぼしがあつてはならない。

文字どおり背水の陣が敷かれ、中村医師が「やるか、やられるか」と表現された水との闘いが各地区、各ポイントで並列的に進められた。アフガン東部、人家もほとんどなく夜はかなり危険な場所だとされるクナル州とニングラハル州の境ジエリババには、三ヶ月間休みなく日本人が働きつづけ、日本人の執念が充満していたと思われる。

福岡・筑後川の斜め堰を参考に

「冬の最低水位においても取水可能な水路を」という中村医師の思いは現実のものとなった。先生と見に行つた筑後川の山田堰。そこからヒントを得たというすばらしい斜め堰が出来上がった。

長さ100m以上もあるこの斜め堰の完成は、中村医師、石橋さん、鈴木祐治くんの大奮闘なくして成し得るものではなかった。対岸の護岸はこれも鈴木祐治君が大変な悪条件のなか、粘り強くやり遂げてくれた。最も難関と言われ最大深部8mを超す岩山開削部分を最も早く、丈夫な水路に仕上げた清宮さん。伊藤さんと小宮君の活躍によりD

地区の溜め池にすばらしい堤ができた。オフィス、農業、井戸をしてこの水路と、全てを一手に引き受けた大黒柱・橋本さんの働きには本当に頭が下がった。まさに大車輪の活躍で重機のアレンジ、植樹の指導をしつつA地区を仕上げ、見事な大工仕事で鉄筋コンクリートの水門の型枠をあっという間に作っていただいた。現地の大工には、間違いないくお手上げのこの迅速かつ完璧な仕事のおかげで、水門のコンクリート打ちを最短で終わらせることができた。こうして、斜め堰を先に延ばし



現地作業員に率先しスコップをふるう日本人スタッフたち

て川の水位が上昇しても、水門で水の進入を止める準備ができ、水門と斜め堰の「心中」は回避された。水門のコンクリート打ち（鉄筋配置後、型枠を設置、その後コンクリートを流し込む）は水がない状態でないと無理、これを終えない限り斜め堰を延ばすことは不可能だったからだ。

強固な取水口さえできれば……

自分とはといえば、「強固な取水口さえできれば何とかなる」という一念に頑としてこだわり、この三ヶ月間朝から晩まで取水口でレイバー（作業員）と悪戦苦闘していた。大量の蛇籠（ピラミッドを組み上げ、部厚い鉄筋コンクリート構造と一体化させた。クナール上流側から見ると要塞のように見え、「またヘリに攻撃されるんじゃないか」と先生は笑っていた。蛇籠プロジェクトは万全の結果を出し、聖牛プロジェクトのメンバーは現場で蛇籠の組み立てから鉄筋の折り曲げ、配置、コンクリート打ちまでこなし、彼らを夏から地道に育ててきた成果は期待を上回るものだった。

取水口で使用した蛇籠（布団籠…二×一m）だけで千百個、使用鉄筋総重量が十二トン、打たれたコンクリートは四百七十³m。水路全体でこれまでに使用した蛇籠の体積は七千m³を超える。これは、一枚ずつレイバーによって丈夫に編み上げられた蛇籠、その亜鉛メッキ鉄線だけで八十トン以上になり、岩山を砕いて運び、蛇籠内にひとつずつ積み上げた石の総重量は一万三千トンを超えたことを意味する。約一万个の土囊や、大量の柳の植樹も含め、この水路が如何に手作りの水路で、

多くの人の手によってひとつひとつ地道に積み上げられてきたのかを改めて感じる。

中村医師自ら行った苦心の測量の成果がよどみなく流れる美しい水路を作った。突貫工事だったため、一部で水が抜けるというアクシデントはあったにせよ、夏の増水期に向けて改修工事を早めに行えることを考えると、むしろよかつたと思われる。

多くの人達の協力を得て通水は成功。今後も、植樹、土囊の設置、取水口付近とC地区の護岸強化など、水路をより頑丈なものにしていくための

困難を友とし、ユーモアを糧として工事完遂

土木専門家 石橋忠明

「オポ・ラジー（水が来る）！」

オポ・ラジー！（水が来る！）。裸足の子も達がちらに駆け寄りまわり付く。セイダ・オポ・ラジー！手を挙げて応える。足下を見る。水路ではスタッフの心の何ものかを抑える様に流れて来る水の半歩先を歩く。一歩ずつ、ゆっくり、ゆっくり、と。そう、水が通ったのだ。今までの

作業は継続していかねばならない。そしてD地区以後の区間の工事も再開される。

山の雪が非常に少ない今年、早魃の不安が胸を過る。現在通水を完了しているD地区から、さらに三キロ先まで水路を延ばしたい。出来る限り早く。ここまで水を通せば多くの田畑に水を配ることが可能になる。今年の夏を目標に何とか実際に水を運んでいきたい。多くの日本の良心が現実の形となって、命の水が乾いた大地を潤すために。ご協力、本当にありがとうございます。

様々のモヤモヤ、シガラミが一挙に晴れた。水が元氣と勇気をくれた。やっと十万人の命を救う水路に水が通ったのだ。

ウンボのオベ（操縦技術者）としてベシヤワールに飛んだのは去年の十月。それから数カ月、様々あった。小生と共に到着したウンボは中古とはいえ電気系統、タイヤ等が故障。工場は発電器に頼り道具は不十分。アフガン人の仕事の荒っぽさに加えて、言葉と習慣の壁。もう困難を友としてやり抜くしかない、と腹を決めた。とはいえ四千米級の山々と眼前に広がる砂漠、そこに点在する泥の家、ロバ・ラクダ・山羊・羊の群、子どもや老人の明るい笑顔……珍しさも手伝ってか堪らない魅力もこの地は放っていた。

早朝ウンボで現地に赴く。子ども達がちららに向けて手を振る。足の悪い男が頭を下げる。ラクダがウンボと競争する。羊が横切る。昔沃野であった砂漠土漠がずうと続く。よく見ると向うにク



重機操縦の専門家として活躍した
石橋さん

ナール川が見える。我々の水路は、この川から砂(土) 漠へ水を引き耕地化を可能にして十萬難民の帰還帰農を促そう、というものだ。ヒンドゥークシユ、スレイマン、……山々の雪が解け雨季と重なって川が増水する前に取水部の水門・堰を完成せねばならない。間に合わないといふ事は来年の冬まで待たねばならない。ことは十万人の命に係わる大事である。即ち自然と人の「時」をかけた死斗という訳である。

斗いの中にも常に笑いが……

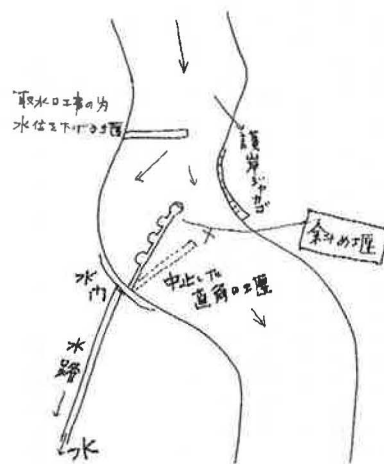
「斗い」の中にも笑いは絶えない。現地スタッフ・レイバー・日本人スタッフ・ドライバー皆握手し抱擁し合う。生を確かめ合う様に。パシユトゥー語・英語・ファルシー語(アフガンのペルシヤ語)が飛び交う中我々日本人は「落語」で話し合う。活力を得る為に。

落語的的日常の中で、しかし「時」は待ってくれ

ない。暖冬のせい、日中は真夏の日が身を射る。水門と水位を上げる為の堰作りを急がねばならない。現地特有のスローペースと折り合いをつけつつ。とにかく今冬は「取水部」が優先課題である。もう時間切れ、とばかりに堰を流れに直角に作り出す。水流調節の為、パイプ・聖牛を埋めつつ進む。が、対岸に近づくにつれ川幅が狭まり洗掘も起きて激流となる。なかなか進まなくなる。中村医師が泥まみれ水浸しになりつつ最先端でパイプを埋め込む。レイバーが心配して代わりに泥々になる。もう皆一体である。真冬のクナルである。落ちたらひとたまりも無い。水の冷たさは身を切る。ジッカ(上げる)！、タオカ(曲げる)！ 叫びつつ、命懸けの作業が続く。

「水の道」は「人の道」

だが、皆で身体を張って延ばした堰も結局激流に阻まれて中止。急遽日本古来の斜め堰に方針を変え激流を作らずに進むことにする。自然相手の仕事である。臨機応変、朝令暮改は日常茶飯事である。苦勞して埋めた土石を笑い乍ら掘り返し斜めの方向へと埋め直す。途中蛇籠で円形の補強物を作りつつ、右背面に巨石を入れて支えながら進む。ダンプの誘導も一仕事である。「時」の遅れは巨石ハンターがローダーを以て穴埋めしてくれた。バケットより大きい数トンの巨石を先端と背面に次々と放り込む。一挙に水位と長さをかせぐ。正に一石二「長」である。水位が上がリ、盛り土を超えて工事中の水門に入る。水門作りの担当者から睨まれる。しかし水門作りもザルザル(急いで)やらざるを得なくなる。全く巨石様々である。山々の雪は申し訳程度にはりついている。川中の見え隠れしていた石が視界から消える。自然は雪解けを告げていた。水門も堰も、しかし完成していた。間に合ったのだ。



今こうして水路の静かな流れをみていると、様々な絵が脳裡を去来する。荒っぽいメシ、チャイをいつも誘ってくれたレイバーたち、今の日本では稀有ともいえる明るい、やさしいスタッフ、……そして、どうしようも無く貧しいのに必死に明るく生きている子ども達。又来ようと思う。彼らに会う為。そして、この水路が、荒漠たる人類現代史に真珠の如き光を放つことを願って。

道がある。

水の道である。

命の道である。

無償の支援……

人の道である。

怒号と哄笑の飛び交った

三ヶ月でした

ダラエヌール診療所勤務

鈴木祐治

女性患者診察を巡るトラブル

昨年十二月、ペシャワールにて一週間の休暇、ダラエヌール診療所改装の為の機材購入などを終え、ダラエヌールへ向かいました。

その月はダラエヌール勤務担当予定のドクターが派遣への不満を漏らし、急遽、仲地医師が向かわれることになりました。イード（犠牲祭）で三日間の休院、前記の理由でドクター派遣が遅れた為、更に二日間の休院となり、患者さんが増加するであろうと予想されました。やはりその初日は女性患者の日ということもあり、百八十人を超える患者さんが来院されました（平均百三十人前後）。そんな中でも仲地医師は、初めは英語での通訳を入れながら患者さんと接していましたが、しばらくするとパシウトウ語のみのやり取りで診察されるようになり、患者さん一人一人に対して、とても丁寧に診ておられました。

その日は朝八時開院から午後三時半頃まで休憩

を取らずに診察に当たられ、その後も急患として来院した子供の頭部の傷の縫合手術に当たるなど、一緒に働いていた現地人スタッフも、学び取るかのように真剣に診療に当たっていたのが印象的でした。

ですが、そんな中でもとても残念な出来事が起こりました。次の日の早朝、ダラエヌールのオフィスに二十人前後の村人達が現れました。何事かと尋ねてみると、その内容は、

「以前の事があるにも関わらず、更に日本人医師までを連れてくるのは納得がいかない！ 診療所を閉めてくれ！」という抗議の内容でした。

「以前の事」というのは、三ヶ月ほど前（九月上旬）にも似たようなことがあり、その時は私の考えの甘さから起きたミスで、（付添いの方に了解を得て）脈拍を測るために何人かの女性患者の手を触れたこと、また、一度だけ熱を見るために額に手を当てたことなどが原因でした。その時も村人達から、

「日本人を前面に出して働かせないでほしい。閉めてもらっても構わない。」などの抗議を受けておりました。

その後、村人達の要請を受けて三日間閉院し、その間に周囲の村の長老達を集め、中村医師達との間で話し合いがもたれました。その結果、この行為は一部の人間の「意図」によるものであると判明し、女性患者を診る際にはアフガン人医師を置くこと、という内容で折り合いが付き、無事にクリニック再開となりました。再開に当たり、ア



一日500人前後のレイバー（現地作業員）が汗を流した

フガン人医師が派遣され、その後は問題なく診療を続けております。

あなどれぬ風邪

この月に限っては、患者数が異常に増え、ほぼ毎日二百人を超え、多い日には二百八十人を超える日までありました。ドクターの診察結果では、約八割の患者さんが風邪の症状にあたるものと診断しておりました。患者さんの殆どは、診療所まで最低でも一時間近く歩いて来られます。遠い所



蛇籠工房（ワークショップ）もフル回転した

になると、五時間以上かけて歩いてくる患者さん
もいます。

私達の感覚で考えれば、「何故、風邪の症状で
五時間も歩いてくるのだろうか？」と思うかもしれ
ませんが、現場で働いている日本人の間でも、熱
や関節の痛みなどが出ればマラリアではないかと
と、真つ先に疑ってしまいます。大抵はただの風
邪で済んでいます。やはりマラリアに感染して
いる場合もあります。軽い病気なのか、重い病気
なのかわからない、皆そういつた意味での不安が
強くあるのだらうと思います。薬もなく、医者も

いない、そのような地域で生活している人達はど
れだけ不安なことでしょうか。

こういった環境で生活をさせて頂き、改めて医
療の大切さ、必要性を痛感する思いです。

護岸と平行して柳を大量に植樹

一月、用水路工事はスタッフを結集しての総力
戦となり、今回私もお手伝いをさせて頂くことにな
りました。現場は、二月の雨季、三月の雪解け
水によるクナル河の増水が迫っている中、堰
取水口工事が大詰めを迎えていました。始めはた
だ付いて回るだけで精一杯で、見るもの全てに圧
倒されていました。「殺らなければ、殺られる」、
そんな異常な雰囲気の中で、見よう見真似で作業
に取り掛かりました。

現場では、水位の減少する冬季に用水路へ水を
取り入れる為の、斜め堰を作る作業に重機操縦士
の石橋さんとともに当たりました。

長さ約百m、幅六mの間隔で大量の巨石を投入
して埋め立てを作り、それと平行作業で、堰強化
の為に蛇籠を繋いで直径五・五mの円形状の巨大
な建造物（凡そ六十トン）を十三m間隔に三ヶ所
築き、更にその二十五m先に柳の植樹地帯。この
植樹地帯は直径十mの円状で、周囲一mは蛇籠で
固め、蛇籠の背面、中心部には岩と土囊を敷き、
その上から土石を流し込み、百本もの柳を植え込
んだものです。

この場所は、増水時には川に浸かりますが、根
ぐされを起こさないという柳の木の特徴を生かし
たものです。

対岸の洗掘防止も難工事

これと同時に、斜め堰を築いたことによる影響
のできるであろう増水時の強流によって、対岸側
（湿地帯）が洗い流されない為の護岸工事が行わ
れました。約二百二十mの距離に丸石を詰めた蛇
籠を一・六m×二・六mの高さで壁のように敷き
詰めていき、底の洗掘防止の為に蛇籠の前面には、
聖牛（三角形の鉄筋コンクリート柱）を敷き詰め、
交互に三段に積み、ワイヤーで固定していき、そ
の隙間に大石を入れて補強しました。

蛇籠の背面は土で埋め、その上に石を敷き詰め、
蘆と柳の木を植えていきました。聖牛は一個百kg
あり、三人掛かりでなんとか運べる重さです（こ
れを約四百三十個使用）。

対岸へ車を送ることはできないため、十人乗り
のボートで聖牛を四個ずつ対岸へ運んでいく事にな
りました。このボートは、タイヤチューブと木
の枝を継ぎ合わせた手製の筏で、アミンという青
年レイバー（労働者）の厚意で使わせて頂いたも
ので、何度も壊してしまいましたが、嫌な顔せず
最後まで協力してくれました。

また、聖牛を運ぶ作業でも、足場が悪く危険な
所を二百二十mに亘り運んでいくという激務の中、
文句を言わず（言った人もいたが）最後まで運び
きり、本当に感心させられました。

自ら率先し労働者を鼓舞

こちらも、そんなレイバー達の働きに応えるか
のように、「手袋が無いからできない」と言われ

れば、手袋を脱ぎ捨て、傷だらけになってやって見せ、「重くて運べない」と言われれば、意地でも更に重いものを運んで見せ、「長靴がないからできない」と言われれば、びしょ濡れになりながら作業して見せる。時には激しく怒鳴り散らし、片言のバシウトウ語とジェスチャーで細かい作業の重要性を説明し、昼食の時間は冗談を言い合って談笑します。

こちらの本気の姿勢を感じ取ると、彼らも必死になって作業に取り掛かってくれます。その瞬間は本当に頼もしく、同時にとても嬉しいものです。日本人同士も同様で、この二ヶ月間は皆休日返上で働き、毎日仕事後のボロボロになった姿を、お互い見合っては笑いを交えて励まし合い、現場に行けば表情を一変させて戦いに挑みます。そんななかでの昼食時に頂く、砂糖をたっぷり（大さじ四杯）入れたシンチャイ（現地の緑茶）を飲んでる瞬間が唯一、平穏を感じられるひと時であり、皆の毎日の楽しみとなりました。

用水路工事の初期から働かれ、抜群の行動力と判断力で現地人との強い信頼関係を築きながら働いている、清宮さん（本当にご苦労様でした）と鈴木学さん。常に全体を視的確に判断し、行動する、皆の心強い存在である橋本さん。用水路の仕事と併せ、いつも美味しい料理を作って皆の体力を支えてくれた小宮さん。本物の親父ギャグと巧みな重機操縦で奮闘された石橋さん。水路を回り、レイバー達への給料配り、管理に当たった伊藤さん。この激動の二ヶ月間、どの部分でも、お互いの助け合いなしには成しえない仕事であったと

思います。

ここまで、皆大きな怪我や病気などもなく作業

重機購入の特命帯び、

カラチへ行ってきました

現地連絡調整員

近藤真一

一か八かの買い物

今回、私は灌漑用水路工事に必要な重機購入の為、二度、計一ヶ月ほどパキスタンの南に位置する大都市、カラチに行ってきました。

私達の病院があるペシャワールからカラチまで、バスで約二十五時間。トイレ休憩、食事休憩、お祈り休憩が道中何度かありますが、一度だけ食事休憩の無いバスに出会ってしまい、一日中何も食べられなかった事がありました。

カラチには大きな港があり、日本や中国等、外国から色んなものが入って来るそうです。私達が探し求めているものはユニボ（油圧シヨベル）、ジャックハンマーにホイールローダの三種類で、日本からシンガポールを経由してカラチにたどり着きます。

を進められたことに、改めて全てのスタッフに感謝をする思いです。

生まれて初めてのカラチ旅行で、初めての重機購入です。始めはどうなることかと心配しましたが、どうにかなるものです。なによりも今回の旅は本当に幸運が付きまといました。

一番の幸運は私達が本当に人のいいお店と出会うことが出来たということです。普通パキスタンで重機を購入するには理不尽なことが多いのです。今回、重機購入の為、私と一緒にカラチに行ったアブデュル・ハミッドさんが以前訪ねたことのあるお店ではまず、自分の欲しい重機をお店側に伝え、写真を見せてもらいます。写真を見て気に入れば前金を払います。実際に重機が港から届いたときに初めて実物を見ることができました。

この時点で残りのお金を払うのか、払わないのかを決めなければなりません。もちろん試運転なんてものはさせてもらえません。お店に着いた時点で目的の重機がまったく使えないもので、これは要らないと言っても、前金は返してもらえません。一か八かの買い物です。

それが、私達がカラチで出会ったお店は交渉の末、前金は要らない、試運転も気が済むまでしてよい、と言ってくれましたし、値段に関しても相場だろうと思われる価格を提示してくれたのです。カラチで訪ねた他のお店ではなかなか状態の良いものは見つからないし、見つかったも値段を相場より相当高く見積もられたり、散々でした。

それが、このお店では近く日本からホイールロ



工事現場付近を低空で連日飛来する米軍ヘリ

ーダが新しく届くから、それを私達の為に用意しようと言ってくれたのです。カラチに着いて二日目の事でした。

「あれならもう売れた」

しかし、それからが長かった。約束の日に再度同じお店に行ったのですが、「明日来る」と言われ、次の日に再度訪ねると、「二日後に来る」と言われました。それから毎日そのお店には顔を出しました。

「二日後に来る」と言われてから当日、彼らの返事はこうでした。「あれならもう売れた」。

このお店は自前のホームページを持っているのですが、そこに載っている写真だけを見て購入した人がいたそうです。パキスタンでは実物を見ずに重機を購入するのが普通なのだそうです。椅子に座りながら「そうか売れたのかあ」と落ち込んでいると、この店の主人が「そう言えば」という感じで、「新しくユニボが届いたけど買うか」と一言。昨日もその前の日もユニボについては何にも言っていなかったのにと思いつつ、私達はホイールローダのことまで忘れて、すぐに試運転、エンジンのチェックをし、ベシャワールの病院に連絡を入れました。エンジンの状態は良く、オイル漏れもなく、これといった故障箇所も見つからず、アブデユル・ハミッドさんも今まで見てきた中で一番良い、と評価しました。今回の買い物で何よりも一番欲しかった物が手に入った瞬間です。

あと数日遅かったら……

二つ目の幸運はこのユニボです。ユニボを購入しエンジンオイルなどを入れ替えている作業中、見慣れない人が私達の近くに寄ってきて話しかけてきました。

「このユニボを私に譲ってもらえないか」

この人は以前、ユニボを紹介して欲しい、とこのお店に問い合わせたところ、満足のいく写真を受け取り、そのユニボを購入する為、七ラック（七十万ルピー）もの大金を前金としてお店に支払っていたそうです。しかし、お金を払った

後にしばらくお店の方に連絡をしなかったため、いざカラチに来てみると、すでに目的のユニボは他の人が全額払って、買ってしまっていたと言っていた。

彼はその事実をお店の主から聞いた後、どうにかならないかと相談したそうです。主曰く「譲ってもらえないかどうか、自分で直接聞いてみる」。そして、彼はしぶしぶ私達の所に来たのです。そう、私達が購入したユニボこそ、彼が前金七ラックも払ったユニボだったので。もちろん私達が譲るわけはありません。

彼はおとなしく帰っていききました。あと数日、私達がこのユニボと出会うのが遅れていたなら、きっとこの人のものになっていたのでしょうか。

また、ジャックハンマーやホイールローダに関しても、お店の人から数日後に届くという情報を聞き、無事購入することができました。今では立派に灌漑用水路工事にて、お役目を果たしていると聞いています。生まれて初めて、いい買い物をしたんじゃないだろうか、思っています。

▼未使用の切手、ハガキを！

*会報の発送費に、年間七百万円以上かかっております。未使用の切手・書き損じのハガキ等お送りいただければ幸いです。（使用済みハガキ・切手は受け付けておりませんのでご理解下さい）

寄る辺なき患者さんの

「砦」として

PMS医師・医局長

仲地省吾

気が抜けない冬の小児疾患

ペシャワールでは二月中旬頃まで暖房を時々使います。ペシャワールは緯度で比較すると山口県や福岡県とほぼ同じなのですが、気候は全然違います。真冬では暖房も使用し、最低気温は五度前後まで下がりますが、それは真夜中だけであって、昼間の最高気温は二十度近くにまで上昇します。いわゆる砂漠気候で一日の温度差が大きいのです。日本の冬に比べるとはるかに暖かいという印象です。

三月の中旬になると（今、現在）最高気温は三十度前半にまで上昇します。しかし、湿度がとても低く二十パーセント台なので、日本で感じる温度とは全く違って、三十度台前半までならエアコンや扇風機は要らず、とても爽やかです。湿度の低いおかげで日本で感じる温度とは七、八度差があります。

しかし、四月の終わり頃から最高気温は四十度

かそれ以上にぐんぐん上昇してくるので、さすがに嫌になります。だから三月は日本で言えば五月から六月の梅雨入り前の一番気持ちのいい時期と同じです。

PMS病院では、入院してくるのは小児患者さんが圧倒的に多いのですが、季節で傾向がまったく違います。冬はほとんどの小児の入院は呼吸器感染症です。喘鳴が聴取できる気管支炎、肺炎などです。夏の様に多量の輸液を必要とするような脱水例は少ないのですが、呼吸不全を起こして酸素吸入を要する症例が多数ありました。もともと超低栄養児が多いので、いつでも突然死する可能性があり気が抜けません。しかもそのような子はほとんどが乳児で、PMS病院の設備は乳児の専用設備を備えているというわけではありませんし、小児専門医もいませんので、近隣の大学病院の小児科に転送するという例も時々ありました。

夏は下痢、脱水が大半

その冬も終わり、今は一年の中でも最も気持ちのいい季節ですので、入院してくる患者さんも少なくなる時期です。肺炎の小児の入院も激減してきました。そして、少しずつ始めてきたのが、夏に増えてくる下痢症の小児です。真夏になると、今度はほんとうにうんざりするほどの下痢、脱水の小児患者ばかりという感じになってきます。

専門医ということで述べると、PMS病院はハンセン病の診療を除けば専門科というようなものではなく、一般的な内科、小児科の患者さんを診るといって general physician（一般医）の病院です。で

すからいろんな科のスペシャリストという医師はいません。でも外来、入院の患者さんには、珍しい疾患の人、何らかの手術を要する人、難しすぎて診断できない人、診断できてもPMSでは治療ができない人がたくさんいます。重症の乳児やICU管理の必要な患者さんもたくさんいます。そういう場合は日本の状況と全く同じで、専門科、専門病院の助けを求めることになります。

転院をすすめる時も慎重に

日本からパキスタンを見て、PMSの医療状況を想像すると、とてつもないへんびな所で、殺到する貧しい難民にいかがいしく医療を提供しているという風景を想像されるかもしれませんが、実際の状況はそうではありません。

どんなに貧しくても、住民は健康に不安を感じれば、たいした症状でなくても病院にやって来ますし、どんなに貧しくても病気になるれば、最高の医療を求めて、患者さんはやって来ます。ですから、PMSでの治療、診断がこれ以上無理となれば適切な専門医や大病院を紹介して転送しなければなりません。

もちろん、こちらから申し出る前に患者さんの方から先に（PMSの力量をすでに判断したのでしよう）他の病院に行きたいと告げられることも多々あります。これは私が働いていた日本の中小病院での立場と全く同じです。ちょっと悔しさを感じるところですが、一方で我が病院で悪化して亡くなるのを見ることがなくて良かったと安堵するのも事実です。



PMS本院（ペシャワール）に入院中の患者さん

もちろんただむやみに手に負えない患者さんを他院に送っている訳ではありません。

パキスタンでは公務員などを除いて一般には公的健康保険は存在しませんので、患者さんは全額医療費を支払わなければなりません。たとえば検査や治療に使う注射器やカテーテル類、生検針、点滴・注射薬なども自分で買って来なければなりません。

PMSでは、もちろんそうではなく、入院時に

百五十ルピー（約三百円）だけ患者さんが支払えば、後は病状や入院期間に関係なくこれ以上支払うことはありません。ですから、重症化して他院に転院する場合は治療費にかなりのお金がかかることが想像できます。それでもほとんどの患者さん（家族）は、より良い治療を期待して移って行きます。PMSに来院する患者層はほとんどがアフガン難民で貧しい人々なのですが、いったいどんなにしてお金を工面しているのかといつも不思議に思っている所です。家族の病気の為なら全財産を投げ捨てても借金をしてでも、という態度です。

ただ中には、PMSが転院を勧めたのは「退院勧告」だと受け取って、こちらとしては他院に移ったものと考えていたのが、実は家に連れ帰って死を看取するというケースもあるのです。ですから貧しい重症の患者さんが大病院に転院して行く場合、「もし、よその病院で治療が受けられなかったら、いつでも我が病院に帰ってきてください。望む時期まで診てあげます」と説明するようにしています。

医療の階級格差

ペシャワールに来た当初は、日本の病院と比較し、設備や清潔度、病院食やいろんなシステムなど、その違いにとまどったり、こんなことではないのかと考えることがよくありましたが、数ヶ月も居るとあつという間に、まるで日本に居るときと何ら変わることなく働いていることに気が付いて我ながら不思議に思ったりします。上記の「転院」

の話もそうです。

ペシャワールは人口二百万人以上もいる大都市ですので、大病院やそれに準ずる病院がいくつもあり、お金がありさえすれば高度の医療をいつでも受けることができます。多くの専門医は欧米で医学教育を受けており、医療技術も劣っている訳ではありません。よその病院にお願いすればCTやMRIなどの高度の検査も受けることができますし、薬も日本で使用されているのはほとんどあるだけでなく、日本ではまだ治験中の新薬なども早々と販売されていたりして驚くこともあるくらいです。しかも超低価格で。

お金がなければ医療を受けることもできないという状況であるからこそ、まだ少なくとも百万人以上はいるアフガン難民や、そしてハンセン病患者さんを始めとして、障害患者さん達の砦としてPMS病院の果たす役割はとても大きいと思います。またペシャワール自体は医療機関が豊富だとしても、地方に行けば医療自体が存在していないと言ってもいいくらいで、その格差は日本の比ではありません。

さらにアフガンistanの地方の状況は言うまでもありません。PMSの職員はローテーションでそんな遠方の我がクリニックに二、三ヶ月毎に一ヶ月間の勤務をします。それは私たちからは想像もできない過酷な仕事です。そのような職員達の為にもPMS病院は教育を提供し、つかの間のオアシスとして安心して働ける、ペシャワール会のセンター病院としても重要な任務もあるのです。

**中村哲医師の本
空爆と「復興」**

【4月末刊】—アフガン最前線報告—

9.11テロ直後から2003年未まで、中村医師と現地日本人スタッフから届いた、鬼気迫る活動報告集 1890円

辺境で診る 1890円

【3刷】**辺境から見る**

ダラエヌールへの道 2100円

医者 井戸を掘る 1890円

医は国境を越えて 2100円

ペシャワールにて 1890円

**聖愚者 甲斐大策
の物語**

「表紙をめぐる小さな物語」が、書下しを加え一冊に 1890円

石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 TEL 092 (714) 4838

ほんとうのアフガニスタン 1260円

光文社 東京都文京区羽羽1-16-6 TEL 03 (5395) 8125

アフガニスタンの診療所から 1260円

筑摩書房 東京都台東区蔵前2-6-4 TEL 03 (5687) 2670
価格はすべて税込価格(税5%)です

●事務局便り

*昨年の十二月と今年の三月に現地を訪れた。

カイバル峠を越え国境の町に着くとアフガンに物資を運ぶトラックの列が続く。米軍の軍車輛を運ぶトラクターも続々とゲイトを通過してゆく。そのトラックの列を縫うように子供達が、自分の体ほどもある頭陀袋を背に担いで運び屋として行き来する。重い袋を持って余し泣きそうな顔をして立ち尽くす幼い少女の荷を年嵩の少年が黙って押し上げてやる。そんな光景も大人たちの視界には存在しないに等しい。

事務所のあるジャララバードの町は埃ですっぽり包まれていたが、日本製の中古車が走り回り、場違いな豪邸も建築されていた。周辺の畑では芥子が盛大に栽培されアヘンの価格が暴落しそうだという。奇妙な復興景気の中で貧富の差はますます拡大している。着いた翌日にはオフィスの裏で軍閥と米軍の死者を出す銃撃戦があり、近くのインド領事館ではリモート爆弾が爆発した。

陽が落ちると気温は急激に下がるが、日中は炙られるような日射しである。そのなかでクナール河から水を引く水路工事は、重機がうなるなか大車輪で行われていた。現地作業員六百人の先頭に立って、真っ黒

に日焼けした日本人青年ワーカーが阿修羅のごとく立ち働き、みな見違えるほど逞しくなっている。陣頭指揮する中村医師自らがシヨベルカーを操り、斜堰に巨石を埋めている。そこに展開されていたのは、まさにアフガン版「花と龍」であった。(御存知の方もあるように、実は中村医師は小説や映画「花と龍」のモデルとなった沖仲仕の元締め玉井金五郎の孫である。)

ペ村から

全国各地から寄せられる寄付金や葉書などに対して、お礼状を書いています。通信欄に書かれているお便りに「そうですねー」と心の中で相槌を打ちながら、一枚の紙を通じて多くの方とお知り合いになれた思いがして心がいっぱいになります。週に一度のお手伝いですが、先輩のご指導よろしく、温かな雰囲気の中、手も口も精一杯動かしています。振り返れば、二年前、ドキドキして事務局のドアを叩きました。それは、世界が激動する中、ひたすら信念を貫き、活動を続けてある中村医師に深い感動を覚えたからです。小さな力がまとまって大きな力となるその過程に微力な私でもお手伝いが出てくることに幸せを感じています。昼も夜も事務局には、善意の人々が集まってお手伝いのリレーが続いています。あなたもどうぞドアを叩いてみませんか。(山)

会 則

- ① 本会の名称をペシャワール会とする。
- ② 本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州ならびにアフガニスタンでの医療活動を支援し、必要な情宣・募金活動とともにボランティア・ワーカーの派遣を行なうことを目的とする。
- ③ 本会は、思想・信条にとらわれず、「支えあい」の精神で一致して会を運営する。
- ④ 会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
- ⑤ 会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
- ⑥ 本会は会誌の発行を、会員は会の拡大に努める。
- ⑦ 本会は総会に於て若干名の運営委員を選任し会の運営を行う。
- ⑧ 役員は改選は毎年総会にて行う。毎年一回総会を開き、会計報告および会の運営について審議する。
- ⑨ 本会の事務局をFARAH HOUSE (〒八一〇〇〇四一福岡市中央区大名一丁目一〇―二五 上村第二ビル三〇七号 TEL七三二―一三三七二) 内におく。